

PRO-LIFE

中絶に反対する運動

1998年6月 No.92

胎児を守る運動

二番目の犠牲者

今年もまた父の日の時期が来た。

この休日に世間の人々がすること
はさまざまである。お父さんと一
緒に山登り、ボート乗り、釣り、水
泳、ハイキングなどの予定をたて
る家族もいる。特に予定をたてな
いで、家にいてお父さんの好きな
テレビ番組を一緒に見るとか、
もつとのんびり過ごす人もいるか
もしれない。みんなお父さんを賛
えたい気持ちになる。だって、お父
さんは特別な存在だから。

お父さんでいることが辛いとき
だってある。中絶に関して父親の
権利に言及するのは、政治的には
正当なことと見なされないのでは
あるが、あえてここで言いたいこと
がある。それは、母親と子ども以外
の中絶の犠牲者としては長い間気
付かれなかった父親の存在であ
る。選ぶ権利を主張する活動家達
が父親を無視する理由はうなずけ
る。なぜなら、彼女らは「私の体
私の権利」「私自身の問題」という
スローガンで自分らを主張するこ
とですべての人を無視しているの
だから。しかし、彼女達が子どもの
父親を犠牲者とは考えない勝手さ
には驚かされる。

長い間、中絶に関しては女と子
どもは犠牲者で、男はその敵だと

当たり前のようにとらえられてき
た。このイメージはごく一般的で
はあるが、半分しか本当ではない。

この立場にあてはまらない種類の
男性だって存在する。レイプ、近親
相姦、虐待、無関心、「都合主義」、
強制、理解不足に至るまで、男性が
中絶の原因を作りだしているケー
スはいろいろあるが、安全で健全
な家庭を築き、神に課せられた男
性としての義務をまっとうしてい
る善良な男性だっている。しばし
ば見過ごされがちだが、このよう
な男性は自分の子どもを養育して
る責任に十分な心づもりも持って
いる。そしてこれらの男性がもつ
とも傷つくのが、どんな理由にせ
よ相手の女性が子どもを産みたが
らず、中絶を望んだ時である。

子どもを中絶された父親は、深
い喪失感に悩まされるといふ。女
性は中絶によって深刻な精神的ト
ラウマを経験することが多いそう
だが、男性が経験する痛みは非常
に感情的な性質のものらしい。つ
まり、母親と同じように中絶に伴
う精神的苦痛は男性にとっても一
生つきまとうものなのである。

まず、中絶後男性は脱力感にし
ばしば襲われるそうである。昔か
ら男性の家庭での第一の役目は家

族、特に子どもを外敵から守るこ
とだと考えられて来た。ところが
今日では、合法的な中絶によって、
彼の産まれ来る子どもが一番の敵
が実は家族の中におり、彼はその
ことについてどうすることもでき
ない。このどうすることもできな
いという感情が、深刻な憂うつ、敵
意、反社会的な行動、性的欲望の減
退、ひどい場合は自殺まで引き起
すことがある。

男性にとつては、中絶は自尊心
を打ち砕くに留まらず、生きる目
的すらなくし、「産めよ、ふえよ」と
いう言葉とともに神によって与え
られた子孫繁栄の終りを意味する。
中絶は、神がそもそも男性と女性
をこの世に創り出した根源的な理
由である人類の繁栄という目的を

打ち砕くものである。

中絶を一回以上経験した夫婦の
離婚率がこれほど高いのもうなず
ける。昔より約束されてきた夫婦
本来の役目を無視し、中絶するこ
とで、家族を結び付ける聖なる絆
を断ち切っているのだから。父親
であり保護者であるという夫の役
目が何も意味をなさなくなり、男
性は守るべき何のつながらりも見出
せなくなる。

法律で許されている中絶の犠牲
者として、母親と子どものほかに
父親もまた続々と名を連らねよう
としている。神が男性に与えた子
孫を守る権利を奪うことで、法廷
はまた別の意味での犠牲者を作り
出している。

ジャック・R・ウォルツ



男性に対する世間のイメージ

息子の子どもは老人の冠であり、父親は息子の誇りである。

「格言の書十七」6

男性一般、特に父親に対する世間のイメージはかなり悪くなっています。家庭で言い争いがあると、夫は無罪が証明されるまでは推定有罪となっていています。もし性的虐待の疑いが父親にかかった場合、その父親は推定有罪なのです。

それでもやはり父親とは高貴な天職なのです。どうしてでしょうか？それはこの地上の父親から、私達は神に対するイメージを引き出しているからです。男が神を自分の父性のモデルにすることによって、個人的及び社会的な幸福のために必要不可欠な愛と権威を学ぶのです。子どもが最も必要としているもの、そして父親が子どもに贈れる最大のものの、それは自信と愛なのです。今日の自己尊重の危機は、男らしさの危機なのです。つまり、男性と女性は父親から適切な自信を受け取らなかつ

たため、物事に自信を持ってないでいるのです。

今日の精神的・感情的な病気は、元をたどると父親の不在や父親の弱さが原因になっていることが多いと、「男らしさの危機」(Crisis in Masculinity)の著者レアン・ペイン氏がその著書の中で述べています。「一般的に言って、今の世代の父親は数世代前から男としての自信を与えられずに育ってきたのです」。その結果、「男としての自信を持っていない父親は、結局自分の息子に自信を与えてやることはできないのです」。

ペイン氏が言う「自信を与える」とは、聖書で言うところの「祝福」であります。父親が自分の子ども達(特に息子)に行動と言葉をもって自信を与えていることを聖書(創世の書二十七：18〜40、四十八：8〜10、マルコによる福音書十：13〜16)を通しても知ることができます。主イエスでさえ、洗礼の時に彼の父親から祝福を受けました。「これは私が喜びとするいとし子である」(マテオによる福音書三：17)

子ども達はその父親の自信を受け継ぐと、彼らはさらに強い自信を持って成長するのです。彼らは自らの信念の元に立つことができ、悪い誘惑に立ち向かうことができるのです。

父親はまた、子ども達に権威を尊重することを教えます。クリスチャンホームの長として、権威は最初から父親に備わっています(脱出の書二十：12、コリント人への第一の手紙十一：3〜、エフェソ人への手紙五：22〜)。父親は子どもを教育し、しつけるよう選び抜かれた者なので(エフェソ人への手紙六：4)。

権威を尊重することは、神学的にも社会的にも大切なことです。親、特に父親は、自分達の権威が神の権威を反映しているということをわかっていなくてはなりません。R・C・メレディス氏が言うように「小さな子どもの中には、親は神自身として映るのです。親は子どもに必要なものを与える者であり、擁護者であり、愛を与える者であり、教育者であり、さらには規律を示す者なのです」。それ故、もし父親が子どもに不従順と無礼を許

してしまつたら、それは神の権威に対する敬意を傷つけていることになるのです。その上、神学者も親を大いに尊敬することをきちんとしつけることが社会的にも重要であることを示唆しています。親の権威を尊重することは、一般的な権威への尊重の基礎になるのです。もし親の権威が否定、あるいはその価値がおとされたら、それは社会の墮落を意味するのです。R・J・ラッシュドワーニー氏は父親と母親を尊重する神命について次のような意見を述べています。

「親の権威とその他全てのものの権威とが深く関わっていることが明らかになっています。家庭の地位と権威の破滅は、全ての社会の破滅であり、無秩序への序論となるのです」。

だめな父親と社会の崩壊との関係は、少年少女の非行に関する一九八八年のFBIによる報告にも示されています。それには18歳以下の若者の犯罪が記述されています。二十一万八千件の強盗、八万一千件の薬物乱用による暴力行為、四万五千件の自動車泥棒、四万三千件の暴行、一万件の放火、五千六百件の強姦、そして千四百件の殺人。

このことについて、ウェルドン・ハーデンブルック氏は、「行動の欠如(Missing From Action)」の中で、次の厳しい質問を自問

自答しています。「何がいったい若者、特に男の子達にこのような深刻な犯罪を犯させているのでしょうか？それに共通する重要な因子は父親の不在なのですか」。

父親の愛と規律は個人及び社会の健康のために必要不可欠であると我々は見ています。父親は神をモデルとし、その神は愛情に満ち、公明正大なのです。彼の権威は愛によって構成されており、それ故、粗暴な暴力は全くないのです。彼の愛は規律の中にも表れています。

このような父親を持った子どもは、適切な自己愛を持ち、他人を尊重することを学びます。また、悪に対して独りで立ち向かう力を備えまし、自己規制と権威尊重も同時に学びます。これによって、家庭でも、教会でも、社会でも、本心に責任ある大人になる準備ができるのです。

このようなことを子どもに伝えることのできる父親が真の父親なのです。

父親・大切な存在

ここ何年かの間で、私は四人の子どもを持つ親として、父親というものがどれだけ大切な存在であるかということに気がついた。

認めざるを得なかったものは何かと言えば、それは「父親不在」と呼ばれる最近の現象である。なんだか修理屋に持つて行けば直してもらえそうな感じがするが、不幸にも人間の行動とはそれほど単純ではないのである。

女性の解放運動が始まったころ、男性達の多くは「好機の窓」を見た気になっていた。人々は結婚やおなかの中の子どもや社



会を犠牲にして個人の権利を叫んでいた。これがある一つの合図と受けとめた男性達がいた。つまり、これからは女性も男性と同じように無責任に振る舞うようになるのだから、何人の女性と性交渉を持つてもよいのだというふうに受け取ったのである。それ以来羽目をはずしている男性もいるのである。

同時に、「ちょっと待って。母親というのは高貴な職業よ。母親であり、妻であり、主婦であることに誇りを持つ権利があつて、申し訳ないと思う必要などないのよ。」と言った女性達もいた。ところがその間男性側から「体どんな声を聞いたらどうするか。サウンド・オブ・サイレンス(沈黙の声)」である。安楽椅子から立ち上がり、「待てよ。我々父親だつて大切な存在なのだ。」とはっきり言う男性はほとんどいなかったのである。

今、男性は安楽いすから立ち上がり、あるいはゴルフ場から離れ、本来いるべき場所に戻る時期が来たのだと思つた。男性には、過去に母親の権利を主張した女性達のそばにしっかりと立つ必要

があるのである。

父親は母親と同じように家族の構造、発展、社会的模範を形成している。もちろん、我々父親には母乳を与えることはできないし、母親ほど生まれた直後の強い絆は保てない。でも、我々の役割だつてそれにも負けず重要なのである。

40歳を越えた最近になつて私は「父親を失つこと」の影響を知る機会に恵まれた。それはきれいな事などではない。実際に離婚を経験した人はみんなの周りにいるでしょう。このような「関係」の崩壊は私達次第なのである。

42歳の知り合いの男が24歳の女性のために妻と家族を捨てたと聞いたらあなたはただ笑うだけだろうか。今は「自分のしでかしたことを抱えながらどうやってこれから生きていくのだ?」と言つような時代ではない。その代わりに、本当は同意を求めているとわかつていても当事者を楽にさせてやろうとするのである。

一体父親とは給料を持つてくる人という以外に何があるのだろうか。与えるだけの人よりもっと重宝されるべきはずなのに。父親は常に男女両方の子どもに男性としての役割を果たさなければいけない。世の中のことを賢い言葉で子どもたちに伝

えてやらなければならぬ。そして常に進むべき道を示してやらなければならぬのである。

良い父親とは血洗いを手伝うだけではない。もちろんそれがイメージ的に効果的であることには間違いないのだが。むしろ良い父親とは、働いて帰宅した時に、妻が子どもと一緒に一日中家にいて、知的な会話や休憩を必要としていることに気付いてあげることなのである。つまり父親が上の子ども達と会話をし、彼らの生活の様子を見ていなければならぬ。また子ども達と一緒にする何かを見付けるということでもある。父親というのは努力の要るものであるが、それが楽しいと思える時さえあるのである。

リーダーシップは、母親や家族の大切さを雄弁に語る家族思いの女性達から生まれたものである。私達はあまりにも頻繁にそのわきでおどおどしすぎていた上に「女の仕事」で手を汚したくないと考えていた。だが、その期間にこそ、父親は敗北を喫したのであつた。



家族は一緒になければならぬ。家族の一人一人が参加していなければならないのだ。それはパートナーシップである。また夫婦がともに手をとつて、神の導く道を進むことでもある。いつも完璧でいることは無理かもしれないが、「神は私達を見捨てていない」。頑張つて、お父さん達! みんなあなたの方を必要としているよ。

子どもの人生を奪う中絶

私は中絶については、そう思ったときに考えればいいという思いがあり、あまり深く考えたことはありませんでした。しかし、中絶のビデオを見て、自分の体が傷つけられるのは絶対にいやだし、一つの喜ばしい命を、あんなにも簡単に殺すなんて、信じられませんでした。保健の授業で学んだときは、子どもを育てるのが困難(若すぎるなど)な場合は、中絶をするのも仕方がないと思つていました。しかし、一生懸命生きようとしていた赤ちゃんの映像を見たら、絶対に中絶すべきではないと思つた。言葉にどう表していいのかわかりませんが、中絶は一つの命を奪うことになりません。その子の人生を奪うのです。

これから先も中絶はなくならないと思います。けれど、中絶がどんなにいけないことで、危険なことかを、もっと多くの人に知ってもらえるような世の中になればいいと思つています。

小さな人々

私がここで話したい「小さな人々」とは、子ども達でも背の低い人達の事でもない。それは私達の中で忘れられがちな、主としてハンディキャップがあったり、知的障害者だったり、歳をとっていたり、奇形だったり、又は単に必要に思われていない人達の事である。

自分を受け入れ、認め、愛して欲しい、と願っている人が、この世界にはとても沢山居る。しかしその人達は、良くて無視されるか軽んじられていて、悪ければ笑いにされ虐待されているのである。

例えばの話、眼が見えないというのには悲しい事だけれど、目の不自由な人のほとんどは、目の見える人達より知覚力が優れている。それは八年前に私の息子達が、うちの近所に引越してきた目の不自由な婦人に出会って、わかった事である。

その婦人が家の近くの車の多い通りを横切るのに躊躇しているのを見て、息子達は彼女が道を渡る手助けをした。そして彼

女がタイピストとして働いている事や、やはり目が悪いけれども普通の生活ができるご主人と

知った。その時から三人の息子達は、平日は毎日替わりばんこに、婦人がバスに乗れるように彼女が道を渡る手助けをしたのである。その婦人が、息子達に教えてくれた同情心と気遣いは息子達たちに生涯かけがえのないものになった。

やがて私達は、家族ぐるみで彼女と親しくなった。そして、彼女が人間の本质については、私達の目よりもずっと多くのものを感覚で見れるという事がわかった。彼女達は誰が本当に気遣い、誰が見下し、恩着せがまし

く思っているかを見分ける事ができる。同じように彼女達は人が避けていくのも感じる事ができるのである。聖書は呼びかけている、「耳の聞こえない人をのろつたり、盲人の前につまづく物をおいたりするな」(レビの書 一九：14)。病気のせいで障害を持ってし

まった人は、多くの場合周りから、時には家族にすら、無視されがちである。周りの人や家族からの拒否反応や、時には露骨に見せられる嫌悪感も、患者達の身体の病気がひきおこす問題の内の一つだという事が、私は癌の患者の為にボランティアをしていたので、直接的によく見る事ができた。

ある日、私がスーパーマーケットで買い物をしていると、明らかに顔に大きな手術を受けたと見える中年の婦人に出会った。通路で彼女とすれ違う前、何人かの人が彼女の方を見て何か囁いているのに気が付いた。彼女が振り向いて私の方を見た時、とても悲しそうな表情をしていた。

私は彼女に微笑みかけ、「おはようございます」と言った。すると、彼女は人として接してもらえて、彼女の目は輝いたのである。その後私は買い物続け、再び彼女とレジの所で会った。あふれそうな私の買い物かごを見て婦人は、「大家族なのね」と、義顎の大手術を受けた為に、多少言いにくそうに囁いた。

私は微笑みながら、「ええ、五人の息子がいて、いつもお腹を空かしているんです。」と答えました。それ以来、私はその婦人と何

度か出会ったが、いつも少し言葉を交した。じろじろ見られたり、こそこそ言われたりする事が多い中で、私が彼女を受け入れた事を彼女はとても喜んでくれるようだった。それでも公の場へ出てくる彼女はなんと強い事か。あまりにも多くの障害者達が、心無い人達がじろじろ見たりするせいで、うちにこもってしまっている。

私の近所にとても人なつこい、知的障害の男の子がいる。その子がうちに来ると私は彼を会話に引き込む。その子は来る度に必ず、少なくとも一回は、「僕の事、好き？」と聞く。私は、好きだしこれからもずっと好き、と安心させてあげるのである。そうすると彼の顔は輝く。そんな彼の受け入れてもらいたいという気持ちや気に掛けてもらっているという安心感を求める気持ち、私の心を揺さぶる。

私をピーター、又は心無い近所の子ども達が付けたあだ名では「おかしなピーター」、に会わせてくれたのは、またしても私の子ども達だった。息子達がピーターに何かを教える時はとても辛抱強かったし、鬼ごっこをする時もゆっくり走ってやっていた。ピーターの歩き方はぎこちないし、発達が遅れていたもので、彼と遊ぶのには忍耐が必要であっ

た。けれど息子達はピーターの努力を褒めてやり、皆に大切にされていると感じさせてやっていたのである。

詩人のシエル・シルバースユタインは「小さい男の子とおじいさん」という感動的な詩を書いていく。その中に、小さな男の子が歳老いた紳士に話しかけている所が描かれている。男の子は、「時々僕はスプーンを落としてしまっんだ。」と言った。

「私もだ。」
「僕はよく泣いちゃうんだ。」と男の子は続ける。

老人はうなづく。「私もだ。」
「でも一番悪いのは」と男の子は言う、「どうも大人達は僕の事を気にしていないらしいんだ。」

その時男の子は、しわくちやで歳をとった手の暖かさを感じる。「よくわかるよ。」と小さな老人は言った。

しかし私達はこの二人の話している意味が本当にわかっているだろうか？ 小さい子ども達と老人達が必要としているものに理解を示しているだろうか？

神は、キリストの名を信じるすべての者に、助けを必要としている人への神の思いと愛の使者となる事を望んでおられる。神はあなたや私を通して、そんな人々に触れたいと願っていらつしやるのである！

そして主は、

「ありがとう」と仰せられた

夏の朝まだ涼しい時に、母と

娘が座っていました。娘のローズは年老いた母の若い頃に似ていました。母のヘレンは真つすぐ前を見つめていました。無表情で、行き交う車も人々にも全然気がつかなくなっていました。

ローズはアルツハイマー病の母と生活している献身的な娘です。結婚はしていません。彼女の唯一の子どもが母親なのです。

私がローズに初めて会ったのは、危機的な状態にある人達の手助けをする、ここの教区のホープというグループを通じてのことでした。ホープというのは、病気の人や、身の回りのことができない人に代って、車を運転したり、家事をしたり、買物などを引き受けたりするボランティアのネットワークです。夫がしばらく留守の間、ボランティアの人が病弱の妻の世話をすることもあります。

多くの人達が私達のグループを利用してきました。ホープでボランティアをしている私達は皆、最後には自分達がしていることよりもずっと多くのことを

得るのです。

ヘレンは午前中デイケアセンターに行くことになっていました。それで私は、ローズがヘレンを玄関の階段から車の所まで連れていくのを手伝うように頼まれました。

私は二人に挨拶をし、ローズが私をヘレンに紹介しました。私はヘレンのミントグリーンのセーターと、きれいな彼女の白髪を誉めました。私は恐れと不信の眼差しを向けられました。しかしそれは当然のことでしょう。この女性は私のことを知らなかつたのです。彼女は自分の娘さえわからない時があつたのでした。

「お母さん、きょうはケイトが手伝いに来てくれたのよ。」とローズが説明してくれました。しかし、そのように、穏やかに愛情を込めて納得させるように言ってもだめなようでした。最初、ヘレンはどうしても椅子から離れようともしませんでした。ヘレンは私にそこにおいてほしくなかつたのです。彼女は一言もしゃべりませんでした。その必

要はなかつたのです。私が近づいたときに、ただ身体をこわばらせるのでした。

もう一度、ローズがヘレンに話しかけて、家の前に植えてあるバラやベゴニアに注意を向けさせ恐怖心を和らげようとしました。

ヘレンは少しずつ椅子から離れた。彼女はしつかりと娘にしがみついていた。彼女があまりにしがみつくので、私は無力感を覚えました。私はただ指示を待つだけでした。

「母は踊り場までの最初の三歩は自分で歩いて降ります。通りまで残りの四歩降りるのを手伝ってあげてください。」とローズが私に言いました。その間中、ヘレンのおびえた目が私から離れることはありませんでした。

私はローズの愛情と優しさと辛抱強さと寛大さに驚きました。私は事実上自分の母を失ってしまった女性をじつと見つめました。ローズは、彼女を産み、彼女を育て、この世で彼女の居場所を見つけさせてくれた女性の脱け殻の手を引いていたのです。ローズが腹を立てたことなどあるのかしらと思いました。同じような境遇に自分が置かれたら、いったい自分はどうするだろうかと思いました。

「お母さん、大丈夫だからね。」

とローズが優しく言いました。そして、私達は降り始めました。「その調子よ、ヘレン」と、「三段降りることに私が声をかけました。」

けれども、半分降りたところで、私は彼女の表情の変化に気づきました。まだ怯えてはいませんが、不信は消えていました。この仕事を終わらせたいという思いで、彼女の緑色の目は大きく開いていました。ヘレンにとつてこの階段は山に登るのに匹敵するくらいのものでしたのです。ついに私達は車に辿り着きました。

「ヘレン、これで行けるわよ。楽しんでらっしゃい。」と私は言つて、彼女の肩に腕を回しました。彼女の手は、母の指にしっかりとつかまつている赤ん坊のように、私の手にしっかりと巻きつけられていました。そして、私のどこかで彼女を行かせたくないい思いがしていました。

「またあとでね。」その瞬間、すべてが変わりました。ヘレンから離れるまでの数秒の間、私は彼女の目をのぞき込みました。彼女の恐怖心は消えていました。恐怖心の代わりに、美しい微笑みが彼女の顔にあふれていました。彼女は何らかの方法で、私にわかるようでした。その時、私は自分が主の目を見ていることに

気づいたのです。私を認めてくれたのは主だったので。そして、暖かいヘレンの微笑みと彼女の優しい目を借りて、主が、「ありがとう」と仰せられたのです。

ケイト・パフェット



何もHIVを止められない

拝啓、

エイズに関する最近の新聞記事についてですが、ウイルスを媒体にして伝染する疾病は、医学・科学の悪夢です。両者には、ウイルスが生物から生物に、種から種に伝染するのをくい止める手段がありません。

科学的に作り出されたラテックスという物質は、現在、ウイルスをコントロールする防壁として推奨されています。ラテックスは科学的に処理されたゴムであり、適切に製造、貯蔵、使用されると、それは細菌に対しては、確かに効果的な障壁となります。しかし、ラテックスは簡単に劣化し、紫外線の影響を受けやすく、アレルギーの原因になりやすく、50ミクロン以下の微生物を通過させてしまいます。

以上の要素のために、自己防衛として手袋、マスク、フィルター、その他に頼る医師や看護婦達にとつては、重大な結果をもたらしかねません。

悲しいことに、研究のために費やされる巨額な金額にもかかわらず、ラテックスとその関連製品は、今のところ、単細胞の微生物の通過を止めることはできません。

HIVを押さえ込むラテックスの能力についての研究が、一九九三年、「社会科学と医学」に掲載されました。

ラテックス製の防壁、つまり、コンドームを使用している、HIV保持者と彼らの非感染パートナーに関して、入手可能な研究がすべて分析されました。結果：最高の失敗率51%、最低の失敗率18%、平均の失敗率は31%でした。これとは別のWHOの研究は40%の失敗率を報告しています。

簡単に言えばHIVは、人から人に伝染するので、安全な防壁など存在しません。

敬具

B.J. Egan(The Irish Family/Jan95)

痛み

最近、私は非常に痛みの体験をしました。私の左足

が重い伝染病にかかり、医者に切断をしなれば生命に関わると言われ、膝から下の切断を勧められました。

今、手術から6日経ったところです。まだ足から発する痛みが十分に感じられます。医者は、このような痛みを感じるのには普通のことであり、痛みは手術の結果起きる自然なもので、足が治っていることの現れだと言います。

以上述べたことは一人称の形で書きましたが、実は私自身の記事ではありません。これは、私のように切断手術を受けた他の人たちの記事です。しかし、その人たちは私とは違い、手術の前に麻酔をかけられず、手術の後痛み止めを与えられなかったのです。

もう皆さんには、私が書くこととしているのが中絶のことだとお分かりかと思えます。まだ生まれぬ赤ちゃんは痛みを感じないのではと反論する前に、いくつかの最近の事例を見て下さい。ロンドンの病院に依頼されたある調査によると、生まれる前の胎児も痛みを感じていると決定しました。クイーン・シャーロット&チエルシー病院のニコス・フィスク医師の指揮の元、調査は行われました。フィスク医師は、採血のために注射針を胎児に挿入したときに、胎児のストレスホルモンが劇的に増加したと報告しています。このホルモンを子どもや大人の痛みの刺激によって生じるものと比べてみて、フィスク医師は胎児も痛みを感じることができると結論づけまし

た。私は、多くの彼の同僚が彼に同意していると確信しています。

中絶反対論者は、中絶が赤ちゃんを殺すだけでなく、赤ちゃんに過大な苦痛をもたらすというこの事実を何年も前から知っていたのです。

なぜ胎児の痛みに関する記事に気を使つか。赤ちゃんが痛みを感じるといふ事実が、母親が息子や娘を殺すことを「選ぶ」ことから思い止まらせることが出来るでしょうか。私はそうであることを願います。神がおっしゃるように、「自分自身が慈悲を受けたければ、他の人にも与えなければいけません。」自分の子どもたちにそんな忌まわしいことをするなんて、私たちはどういふ人間なのでしょう。か。「選択の自由」といふ名のもとで、年間何百万人も子ども達が殺されるのを何もしないで見ている私たちは何なのでしょ。トーマス・ジェファソンが簡潔にまとめているように、「私たちに命を与えて下さった神は私たちに自由も与えて下さいました。私たちがこの自由が神の賜物だという信念を忘れたときでも、国家の自由は安全なものでしょうか。神が公正です。神がいつか来られることを考えると、私は私の国が心配ではありません。」

ジャック・R・ホルツ

「思い」

精神的身体的理由で憂うつになったり、取り乱している患者が生きていくのを手助けするために医師達は存在しているのです。決して、その人々を殺すために存在しているのではありません。老人や赤ちゃん、あるいは障害を持った人々は、気難しく、その人達とうまくやっていくのが難しい時がありますが、私達自身もそんな時があるのです。そのことで、私達が殺されるべきだということになるでしょうか。